

吉神橋

田作

幸光

一一つ

編

秋枕名書

四

古典文庫

橘神吉

作田

り光幸

つ一一

編

秋枕名書

古典文庫

古典文庫第三三八冊 ©

昭和五十年三月二十日印刷発行

非売品

寄 名 枕 歌
第 四 冊

編 者

吉 田 幸 一
神 作 光 一
橘 里 づ

発 行 者
吉 田 幸 一

印 刷 者
白 橋 印 刷 所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古 典 文 庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京一四五九七番

歌枕名寄 第四冊

目次

卷第十五	畿内部十五	摂津国三（生田篇・三島篇・陂磨篇）	……三
卷第十六	畿内部十六	摂津国四（雜篇）	……四
卷第十七	東海部一	伊勢国上（天照篇・伊勢海篇・伊勢嶋篇）	……九
卷第十八	東海部二	伊勢国下（雜篇）	……一四
卷第十九	東海部三	伊賀国・尾張国・参河国・遠江国・甲斐国	……一七
卷第二十	東海部四	駿河国・伊豆国・相模国	……二九

詞枕名寄卷第十五

幾なほ内部十五

攝津国三

生田篇

布引滝

湊川

三島篇

玉江

芥河

飯磨篇

阿胡海

茅渟海

四八津

真野

生田篇 杜 山 小野 河 池 海 浦 里

六帖歌或云幡磨有生田浦或云津国生田山云々

若两国交隆歟

杜

後拾十三

こゝろをはいく田の森にかくれとも

こひしきにこそしぬへかりけれ

同十九

ありてやはをとせさるへき津の国の

今そいくたのもりといひしは

右一首詞云摂津国にかよふ人の今なんく

たるといひて後にもまた京にありけるを

きゝて人にかはりてよめるとなん

読人不知 四三四

赤染衛門 四三五

詞三

秋初風

君すまはとはまし物をつのくにの
いく田のもりの秋のはつかせ

僧都清胤 四二六

新古四

きのふたにとはんとおもひし津の国の

生田のもりに秋はきにけり

家隆 四二七

続古十七

春曙

秋風に又こそとはめ津のくにの
いくたの森のはるのあけほの

順徳院 四二八

続拾五

弘長元百首 月

夜さむなるいく田の森の秋かせに

とはれぬさとも月やみるらん

衣笠内大臣 四二九

同

時雨ふるいく田のもりのもみちはゝ

とはれんとてや色まさるらん

藤原景綱 四三〇

続古六

木葉ちるいく田の森の初しくれ

秋より後をとふ人もかな

後鳥羽院 四三一

現六

うらかるゝいく田の森の神無月

とはんといひしことのはもなし

四三二

続後五

秋とたに吹あへぬ風にいろかはる

いくたのもりの露のした草

定家 四二三

続古十

おもひやれ生田のもりの秋風に

ふるさところる夜半のね覚を

左京大夫脩範 四二四

右一首福原の都にまかれりけるに生田

といふ所にて古郷を思ひやりて人のも

とにつかはしけるとなん

続拾恋四

大かたの言の葉までも色かはる

秋やいくたのもりのしら露

藤原永光 四二五

新後五

津の国の生田のもりに人はこて

月にことゝふ夜半の秋かせ

中務卿親王 四二六

最勝四天王
院障子

露の色をしはし袖にはと思へとも

いくたのもりに秋風そふく

慈鎮 四二七

堀百

いろ／＼の木の葉手向て秋はけふ

生田のもりにかとてしてけり

中納言国信 四三八

洞院摂政家卅首

秋はけさいくたのもりに過ぬらん

詠合難波

なにはのあしに風をのこして

四三九

詠合明石

しなはやとおもひあかしの浦を出て

いく田の杜をよそにこそみれ

俊頼 四四〇

山

六帖

津の国のいく田の山のいくたひか

我いたつらに行かへるらん

四四一

小野

堀百

旅人のみちさまたけにつむ物は

若菜

いく田の小野のわかなゝりけり

大納言師頼 四四二

千五

湊川 鹿

みなと川うきねの床にきこゆなり

いく田のをのゝさくイをしかのこゑ

刑部卿範兼 四四三

真葛

真葛はふ生田の小野の秋風に

やかていろつく袖のうへかな

定家 四四四

河

千十二

恋わひぬちぬのますらおならなくに

いく田の川に身をやなけまし

藤原道経 四四五

池

拾十四

津の国の生田の池のいくたひか

つらき心をわれにみすらん

読人不知 四四六

右歌異本生田浦云々仍範兼卿類聚浦部

載之

人すまはひとりやとはむ津の国の

いく田の池の秋の月かけ

順徳院 四四七

月

芦霜

月やとる生田の池のあしの葉に

霜をきかぬる秋の風かな

藤原康光朝臣 四四八

時
雨

しくれ行いく田のもりの秋かせに
池のみきはも色かはるころ

定家 四四九

鷺

暮ぬとて生田の池をたつさきの
ねくらやさむきもりの秋風

家隆 四二〇

海

後九

いくたひかいく田の海にたちかへる
波に我身をうちぬらすらん

読人不知 四五一

六帖

右或生田浦云々就異本海入之

風ふけはいく田の海のいくたひか

あるゝころを我にみすらん

四五二

をくれてはいく田の海のかひもなし

しつむみくつとともになりなん

弁乳母 四五三

浦 六帖三幡磨有生田浦若両国交隆歟

後九

立かへりぬれてはひぬるしほなれは

いく田の浦のさかところそみれ

読人不知 四二五

右上所載之海歌之返歌也贈答共海浦異

説也然而多分贈歌海答歌浦云々尚可詳

古来歌合

水のあはのよるへきかたもおもほえす

いつちいく田のうらとなるらん

人丸 四二五

六帖

はりまなるいく田の浦に世をつくす

釣舟

あまの釣舟こかるれはなに

四二六

里

万代

あはれなり生田のおくのさと人も

禱衣

月によな／＼ころもうつなり

権大納言通方 四二七

続拾五

よさむなるいく田の森の秋風に

弘長元百首

とはれぬさとも月やみるらん

衣笠内大臣 四二八

現六

今よりや夜かれぬ物とたのむらん

生田のもりの秋の里人

小宰相 四二五

並一

布引滝 河

たちかへり生田のおくのいくたひか

みれともあかぬ布引のたき

久我太政大臣 四二〇

布引の滝も夜さむにこゑふけて

生田のおくにころもうつ也

家隆 四六一

擣衣

新六

なく涙世のうき時とせきかけて

我身をさらぬ布ひきの滝

為家 四六二

古十七

こきちらす滝のしら玉ひろひ置て

世のうき時のなみたにそかる

行平 四六三

右一首布曳の滝にてよめるとなん

同

ぬしなくてさらせる布をたなはたに

わかこゝろとやけふはかさまし

橘長盛 四二六

右歌詞書云朱雀院のみかと布引滝御ら

んせむとて文月の七日の日おはしまし

て有ける時にさふらふ人／＼に歌よま

せ給けるによめるとなん

金九

天の河これやなかれのすゑならん

天川

そらよりおつるぬのひきの滝

読人不知 四二五

詞九

雲よりつらぬきかくるしら玉を

たれぬのひきの滝といひけん

大納言隆季 四二六

千十六

水の色のたゝしら雲とみゆるかな

たれさらしけん布引の滝

六条右大臣 四二七

同

をとにのみきゝしはことのかすならて

名よりもたかき布引のたき

藤原良清 四二八

桜

岩つたふ山のさくらのしきなみに

風にかけたるぬのひきの滝

家隆 四六九

建保百

たちぬはぬもみちの衣そめはてゝ

なに山ひめの布引の滝

順徳院 四七〇

新古十七

水上の空にみゆるはしら雲の

たつにまかへるぬの引のたき

二条関白内大臣 四七一

同

久かたの天津をとめかなつころも

雲ゐにさらす布引の滝

有家 四七二

新勅十九

布引の滝のしら糸わくらはに

とひくる人もいく世へぬらん

行能 四七三

統後十六

布引の滝のしらいとうちはへて

たれ山かけにかけてほすらん

後鳥羽院 四七四

同

天の河雲のみおよりゆく水の

あまりておつる布引の滝

従二位頼氏 四七五